

深草部事務所改築工事に伴う事前調査

はじめに

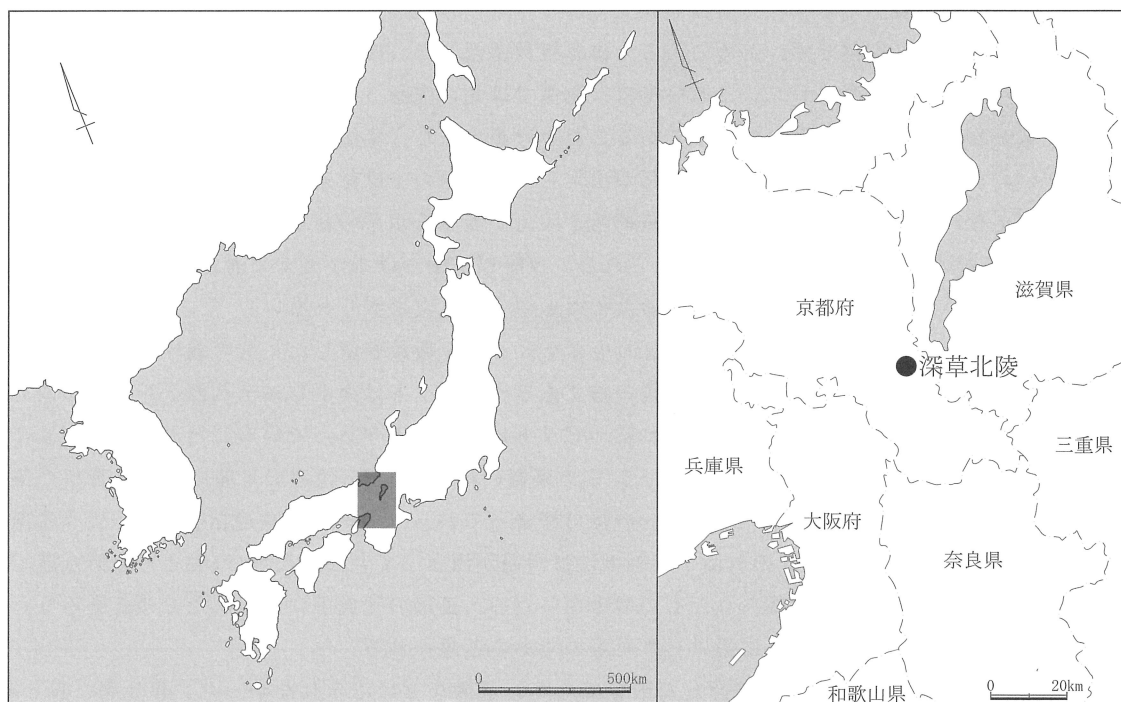
京都市伏見区深草坊町に所在する深草北陵では、後深草天皇以下十三方が合葬されている（第44図）。深草北陵では、管理の拠点として深草部事務所が設置されているが、近年の老朽化が著しいため、建替することとなった。しかし、本陵の陵域は、幕末まで方形堂の管理・祭祀をおこなってきた安楽行院旧境内にふくまれており、これに関する遺構・遺物が検出されることが十分に想定される。そこで当庁では、平成19年度の事前調査に続いて、建替予定地をより広く模索するため、現在駐車場として利用している土地に関しても、事前調査をおこなうこととした。調査期間は平成25年9月27日から10月5日までの9日間であった。

1 既住の調査

当庁では、昭和49年度、昭和57年度、平成19年度にも調査をおこなった（第45図）。昭和49年度の事前調査では、現在の深草部事務所の建物範囲を0.6～1.2mの深さで掘削した。その結果、安楽行院にともなう遺構はなく、客土中から土師器、須恵器、陶磁器、瓦の破片、近世の野壺を検出した⁽¹⁾。昭和57年度の排水設備改良工事にともなう立会調査では、遺構は確認されず、客土中から土師器、須恵器、陶器、瓦の破片を検出した⁽²⁾。平成19年度の事前調査では、現在の深草部事務所と参道を挟んで東側の箇所に、「T」字状にトレンチを設け、約2mの深さで掘削した。その結果、自然流路を確認したが、それ以外に遺構は確認されなかった。造成土中からは、須恵器甕の胴部片を検出した⁽³⁾。

2 トレンチの設定と基本的な層序

調査にあたっては、駐車場の西側へ北西向きに、幅2m×長さ7mのトレンチ（西トレンチ）を設置し、駐車場の南側へ東西向きに、幅2m×長さ6mのトレンチ（南トレンチ）を設置した（第46図）。発掘面積は26㎡である。両トレンチともに基本層序はほぼ同様で、以下に述べる通りである。



第44図 深草北陵 概略位置図（1/25,000,000、1/2,000,000）

Ⅰ層 駐車場盛土。明赤褐色細砂層。径5～10cmほどの礫を多く含む。

Ⅱ層 旧表土。駐車場として用いられる前の表土か。暗黒褐色細砂層。駐車場盛土前に敷いたと思われる布や、ガラス片など現代の遺物を含む。

Ⅲ層 造成土か。灰褐色、黄褐色、赤褐色をはじめとした土層が、斜めに入る。棧瓦、土器などの遺物を含む。

Ⅳ層 堆積土。

a層 黒灰色粘土層。直上から棧瓦が出土。

b層 暗黒灰色粘土層。

c層 灰黄褐色細砂層。瓦、木器が出土。

d層 茶灰色粘土層。

Ⅴ層 地山。

a層 灰褐色と黄褐色が混じる粗砂。

b層 灰黄褐色と暗茶褐色が混じる極細砂。

c層 暗茶褐色と灰褐色が混じる極細砂。

d層 明赤褐色粗砂。



3 調査の結果

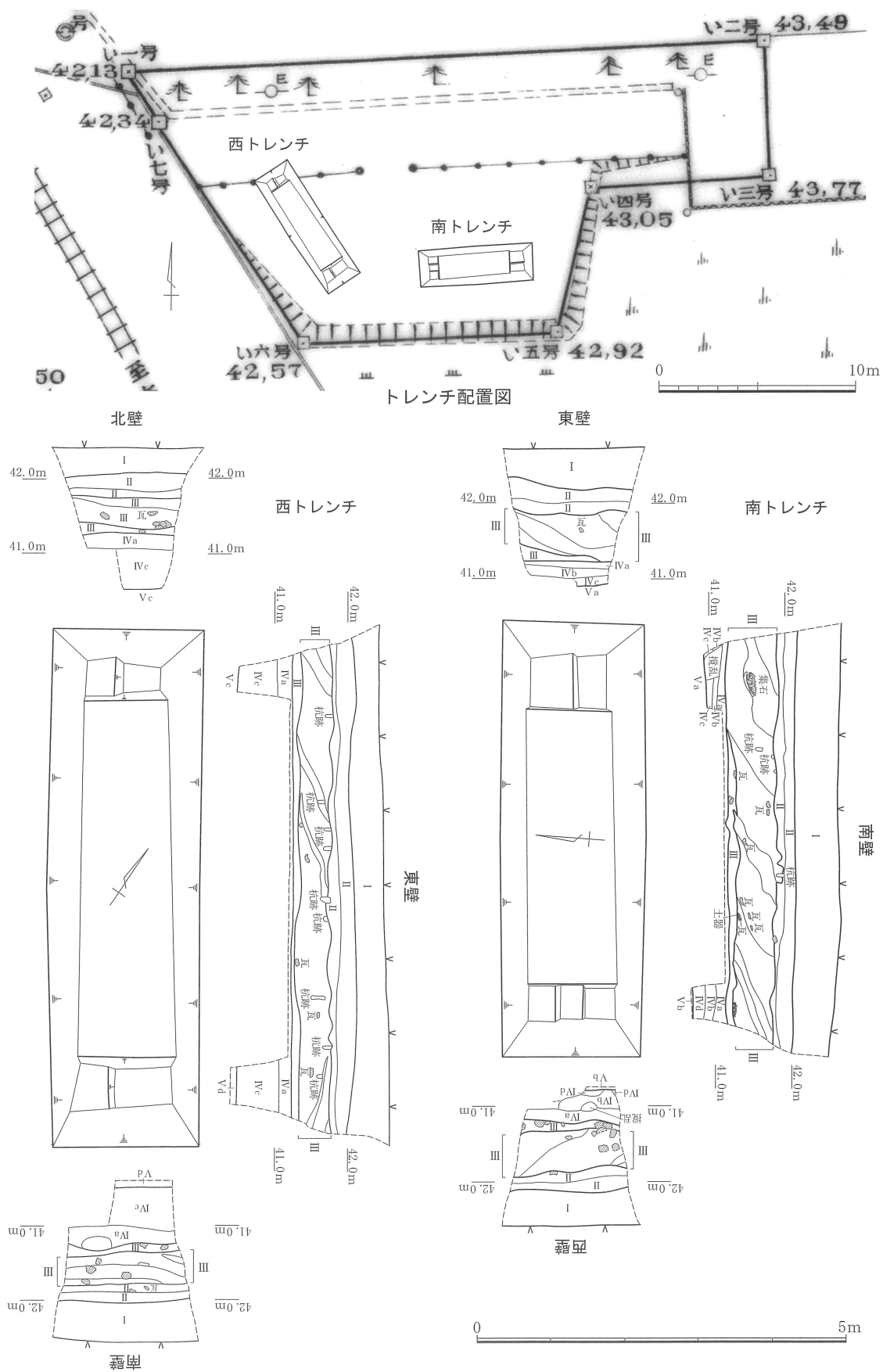
時期 Ⅱ層はガラスの薬瓶をはじめとした近・現代の遺物が出土していることから、近・現代の層位である。またⅢ層は、棧瓦（第47図3～14）が出土していることから、江戸時代以降の層位である。Ⅳ層は両トレンチにおける上下関係からみて、上層からⅣa層、Ⅳb層、Ⅳc・Ⅳd層の順であったと思われる。後述するが、Ⅳ層の各層から出土する遺物に明確な時期差はみられない。Ⅳ層の各層からは灰釉陶器、須恵器、土師器が出土していることから、Ⅳ層は古代の層位であったと考えられる。Ⅴ層は地山である。

性格 Ⅰ層は駐車場盛土であり、Ⅱ層は旧表土である。

Ⅲ層では層位が水平に堆積せず、斜めに入る土層を複数確認した。南トレンチにおいては、東に向かって低くなる土層がみられる。西トレンチにおいては、北側では北に向かって低くなり、南側では南に向かって低くなる土層がみられる。Ⅳ層以下が水平であることを考慮すると、Ⅲ層は人為的に積まれた造成土である可能性が高い。また、Ⅲ層中からは大量の棧瓦が出土した。Ⅲ層の土は付近の建物跡から持って来られたものであると考えられる。Ⅲ層の一番下には、黄褐色と灰色が混じる水平の粘土層がみられる。この層は水が多く、Ⅳ層以下の水が染み出したものと考えられる。Ⅳ層以下からは水が絶えず湧き出ている。造成土は、沼のようになっていた当時の地表を埋め立てるためのものであったかもしれない。

Ⅲ層の上側からは、径約5cm、深さ約10cmの小さなピットを複数確認した。杭の破片と思われる木材がⅢ層中から出土していることから、ピットは杭の跡であろう。ピットは南トレンチと西トレンチの両方でみられ、杭は密に並べられていたものと考えられる。ピットはⅡ層に入り込んでいることから、杭が立てられた時期は近・現代に近いであろう。また、南トレンチ東側の地表下1.2m付近のⅢ層中から、帯状の集石を確認した。10cm前後の礫と瓦片などが約30cmの幅で溜まっており、トレンチ短辺を横断するように南北へ立ち並ぶ状況を確認した。また、この石溜まりの下には汚泥が溜まっていた。これは、おそらく排水溝であったと思われる。Ⅲ層を掘り込んで作られたものではないため、Ⅲ層の造成中に作られたものであろう。おそらく造成土の水はけをよくするために設けられたものであると思われる。

Ⅳ層以下は、断ち割り部分でのみ確認した層位であり、遺構などはみられなかった。Ⅳa層、Ⅳc層は、南トレンチと西トレンチに共通してみられる層であり、Ⅳb層、Ⅳd層は南トレンチでのみ確認した層であ



第46図 深草北陵 平面図・土層図 (1/300、1/80)

る。Ⅳ層は堆積土であり、水が絶えず湧き出る状況であることから、沼のようになっていたと思われる。

Ⅴ層は地山である。断ち割りの箇所ごとに色調や胎土が異なっていた。

4 出土遺物

瓦（第47図、図版47） 瓦はいぶしのない瓦（第47図1、2）とある瓦（第47図3～14）を確認した。前者は、西トレンチⅣa、Ⅳc層から、後者はおもにⅢ層から出土した。おそらく年代の違いを反映していると思われる。

1、2は平瓦で、西トレンチⅣc層から出土した。灰色を呈する。1は、左・下面が残存しており、2は四方が欠損していた。凸面には縄目叩き痕があり、凹面には布目がみられる。

いぶしのある瓦の大部分は棧瓦の破片であり、ここではその中から特徴的な個体を抽出して報告する。3～7は軒棧瓦である。3、4は、西トレンチⅢ層から出土した。5～7は、南トレンチⅢ層から出土した。3は平部瓦当の左側がわずかに残存しており、双葉の茎の文様がみられる。4は、平部瓦当の右側がわずかに残存しており、唐草文がみられる。5は、平部瓦当の左半分ほどが残存している。花卉一体となる六花文が中央にあり、その両側に茎と2回反転した唐草文がめぐる。6は、平部瓦当の右半分ほどが残存している。二花卉一組が三角に配置される六花卉文が中央にある点を除いて、5と同じ文様である。7は、平部瓦当の右側が残存しており、唐草文がわずかにみられる。これらの平部瓦当文様は、宇治市萬福寺松隠堂庫裏および裏門にみられる瓦と類似しており⁽⁴⁾、江戸時代後期以降のものかと思われる⁽⁵⁾。8はおそらく小菊瓦であり、菊の文様がみられる。西トレンチⅢ層から出土した。半分に欠損しているが、おそらく八花卉文であったと思われる。9は、西トレンチⅢ層下から出土した。半分ほどが残存している。鬼瓦の形態に近い。凹面には立体的な文様が描かれているようにみえるが、何を表しているかよくわからない。凸面には指ナデ痕が確認できる。

10、11は、棧瓦である。ともに西トレンチⅢ層から出土した。10の右下には切込みが確認できる。手前側の側面には、四葉の刻印がある。11も、手前側の側面には○の中に×の刻印がある。

12～14は、丸瓦である。12は南トレンチⅢ層、13は西トレンチⅢ層下、14は西トレンチⅢ層から出土した。いずれも大部分が欠損している。凹面には図下方に縄目叩き痕がみられ、図上方では縄目叩き痕の上に重なるように指ナデ痕がみられる。13の正面側の側面には、○の中に何らかの文様が刻まれた刻印がある。

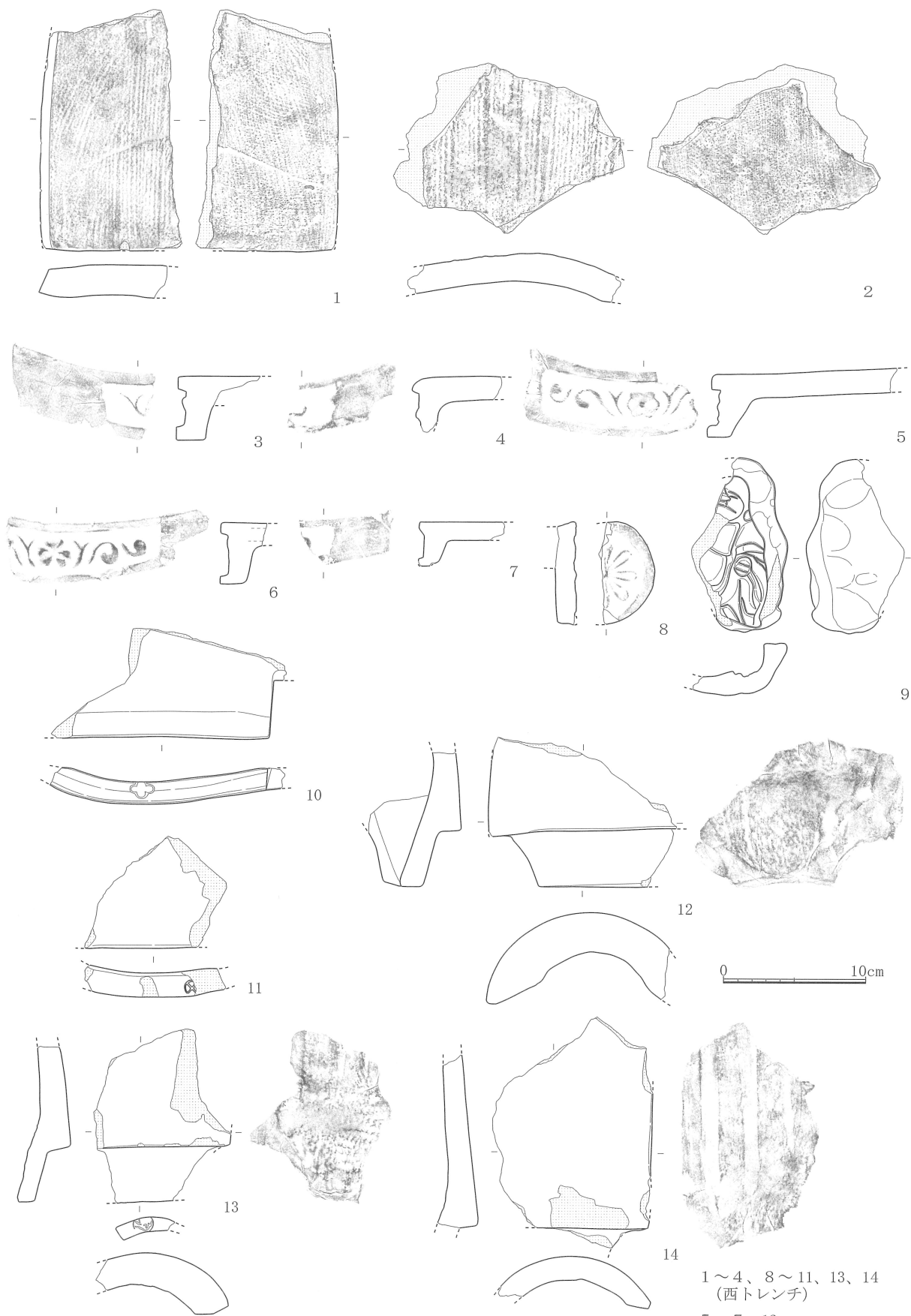
鉄製品（第48図15、図版48-1） 西トレンチⅣa層から出土した。いわゆる和釘である。下端がわずかに欠損しているが、その他は良好に残存している。上端が折り曲げられ、叩き面が作られている。全長17.8cm、最大厚0.9cm。

須恵器（第48図16～18、図版48-1） 16は、南トレンチⅣc層から出土した。須恵器の壺の底部かと思われる。底部復元径は9.6cmである。底部には糸切り技法がみられることから、古代以降のものかと思われる。17、18はともに西トレンチⅣc層から出土した。甕の一部かと思われる。17の外面には平行叩目文の上からカキ目がみられ、内面には直線的な叩目文がみられる。18の外面には横方向のカキ目がみられ、内面には円を描いた叩目文がみられる。

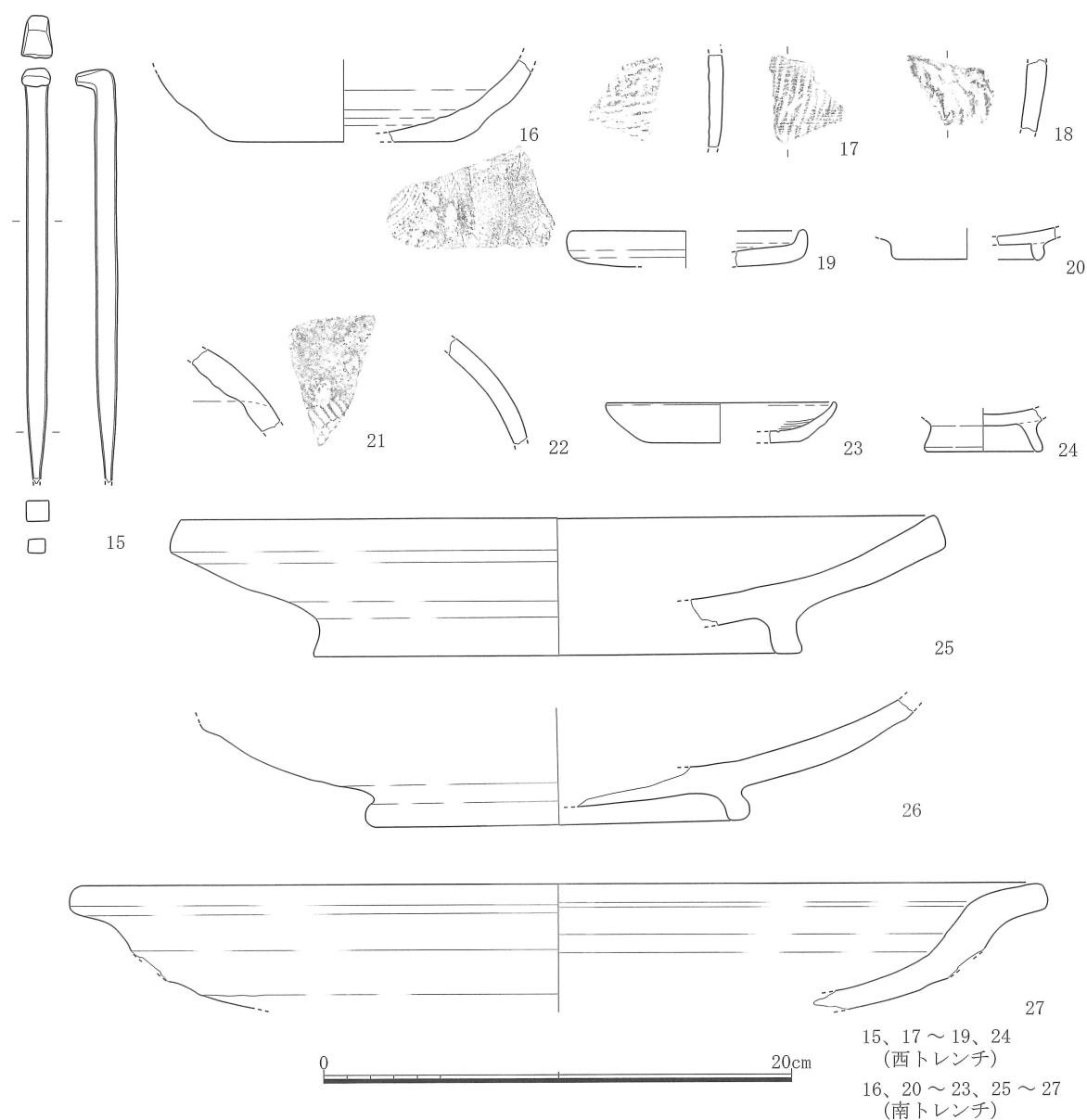
土師器（第48図19、図版48-1） 19は、西トレンチⅣc層から出土した。破片であるが、皿かと思われる。端部が大きく立ち上がる。黒灰色を呈し、復元径10.3cm、高さ1.5cm。古代のものかと思われる。

灰釉陶器（第48図20～22、図版48-1） 20、21は、南トレンチⅣb層から出土した。20は、碗の高台部であると思われる⁽⁶⁾。高台の付け根付近に、わずかに灰釉が付着している。高台は貼り付けである。21は、壺の肩部付近かと思われる。外面には灰釉が付着する。粘土のつなぎ目を境に上部は太くなる。肩部のつなぎ目より下には平行叩きがみられる。22は、南トレンチⅣd層から出土した。壺の肩部かと思われる。外面に灰釉が付着する。

播鉢・茶碗（第48図23、24、図版48-1） 23は、南トレンチⅢ層から出土した。播鉢の破片である。内面の底部付近には、横方向の線刻がみられる。緋色を呈し、釉がかかっている。色合いから見て、備前の



第47図 深草北陵 出土品実測図 (1) 瓦 (1/4)



第48図 深草北陵 出土品実測図(2) 鉄器・土器 (1/3)

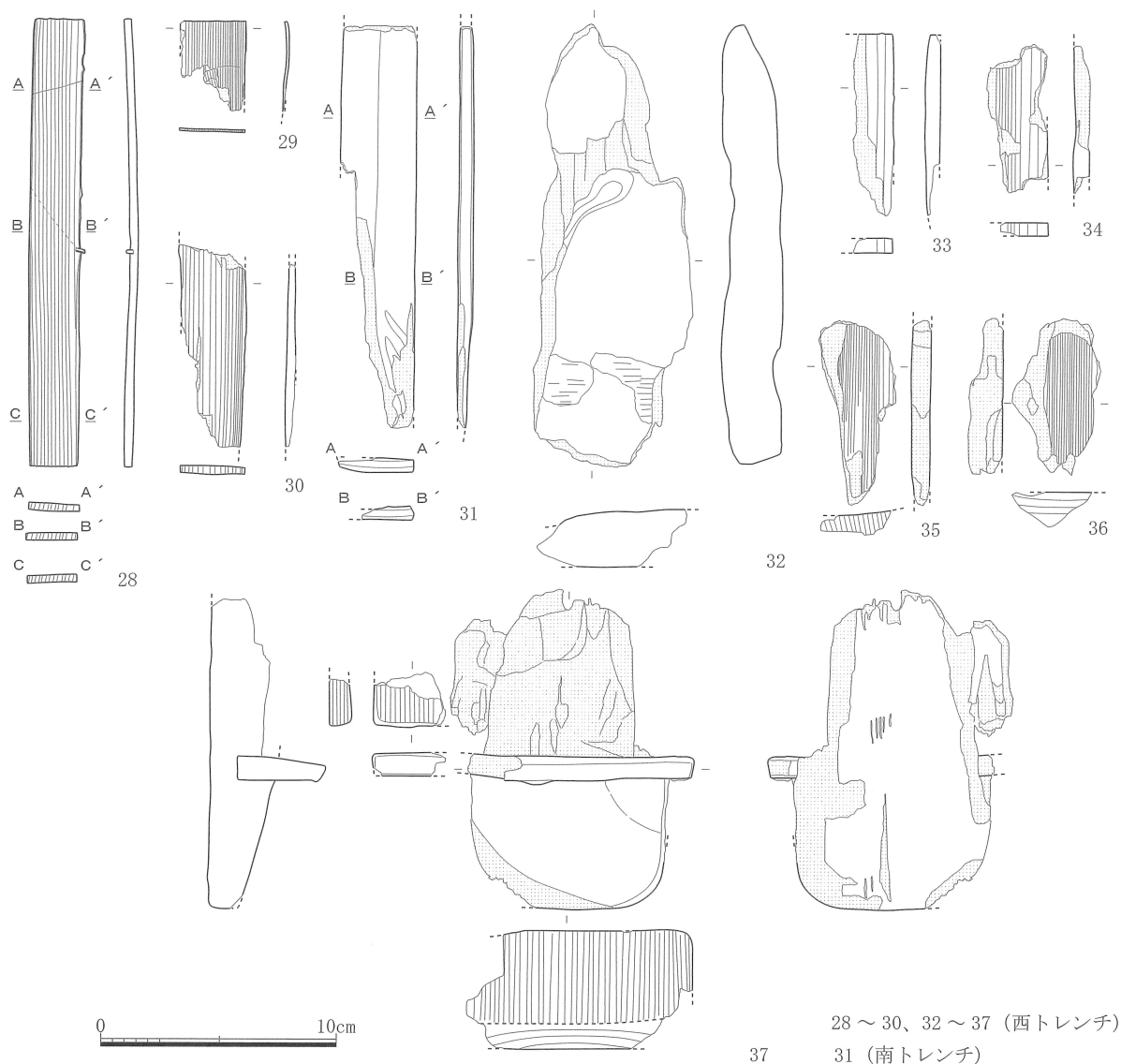
ものかと思われる。復元径 9.9 c m、高さ 1.7 c m。24 は、西トレンチⅢ層から出土した。茶碗の高台かと思われる。高台は別造りである。全体に赤茶色の釉薬が確認できる。底部径 5.0 c m。

鉢 (第 48 図 25、26、図版 48 - 2) 25、26 は南トレンチⅢ層から出土した。ともに鉢かと思われる。25 は、外面にはヨコナデがほどこされる。高台は別造りである。明赤褐色であり、口縁部復元径 32.2 c m、高台底部径 20.9 c m。26 は、25 と類似しているが、高台の先端部が玉縁である点が異なっている。黄赤褐色を呈し、高台底部径 16.4 c m。

焙烙 (第 48 図 27、図版 48 - 2) 南トレンチⅢ層から出土した。底部付近が欠損しているが、焙烙かと思われる。口縁部が大きく外彎し、厚くなっている。胴部は口縁部と比べて薄い。口縁部復元径 41.7 c m。口縁部の形からみて、近世のものかと思われる⁽⁷⁾。

木製品 (第 49 図、図版 49) 28、29 は西トレンチⅣ c 層、30 は西トレンチⅣ a 層、31 は南トレンチⅣ b 層から出土した。32 ~ 37 は、西トレンチⅢ層下から出土した。各層から出土した土器、瓦の特徴からみて、28 ~ 31 は古代以降、32 ~ 37 は江戸時代以降のものと考えられる。

28 は、スギ科スギ属スギの柾目材である⁽⁸⁾。赤外線撮影をおこなったが、墨書は確認されなかった。右



第49図 深草北陵 出土品実測図 (3) 木器 (1/3)

側面の中央付近には木釘がついている。また、表面の上方には左斜め下方向、裏面の中央付近には右斜め下方向の線がみられる。おそらく目安線であったと思われる。これは、何かの部材であったと思われる。長さ 18.9 c m、幅 2.3 c m、最大厚 0.4cm。29 ~ 31 は、加工面があるため木製品ではあるが、器種はわからない。29 は、マツ科モミ属の柾目材である。上端と右側面の一部が残存していた。墨書はみられない。28 と比べて幅広で薄くなっている。現存長 38 c m、幅 2.8 c m、最大厚 0.2cm。30 は、ヒノキ科アスナロ属の柾目材である。上下端ともに欠損している。現存長 8.4 c m、幅 2.8 c m、最大厚 0.4cm の板材である。31 はスギ科スギ属スギの板目材である。上下端ともに欠損している。現存長 17.0 c m、幅 3.2 c m、最大厚 0.7 c m。32 はブナ科ブナ属の柾目材である。上下左右ともに欠損しているが、表面に加工痕がみられることから、何らかの製品であったと思われる。現存長 18.8 c m、現存幅 6.7 c m、最大厚 2.7 c m。33 は、マツ科モミ属の柾目材である。上端と右側面の一部が残存していた。現存長 7.7 c m、現存幅 1.7 c m、最大厚 0.6cm。34 は、マツ科モミ属の柾目材である。右側面の一部が残存していた。現存長 6.3 c m、現存幅 2.6 c m、最大厚 0.7cm。35 は、コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキの板目材である。上下左右ともに欠損している。現存長 7.8 c m、現存幅 3.2 c m、最大厚 0.9cm。36 は、ノウゼンカズラ科キリ属キリの板目材である。現存長 6.7 c m、現存幅 3.7 c m、最大厚 1.4cm。

37は下駄である。台板はノウゼンカズラ科キリ属キリの板目材、歯はブナ科ブナ属の柾目材である。台板の一部と歯の片方が残存している。壺穴がみられないことから、おそらく台尻と後歯の部分であったと思われる。以下、本村充保氏の研究を参照しつつ、特徴について述べる⁽⁹⁾。台板と歯は別造りで、台板には歯を固定するためのホゾ穴がみられない。差歯下駄のうち、いわゆる陰卯下駄と呼ばれるものである。台板の平面形は各辺が曲線で構成されており、小判形と呼ばれるものである。台板の横断面形は逆台形である。歯と台板の接合部の幅を比べたとき、歯の方が台板よりも広い。歯は両小口から独立した位置にある。また歯を側面からみたとき、下駄の歯が「二」の字形に平行になる。

台板と歯が別造りで、歯を固定するためのホゾ穴が台板にないという特徴は、近畿地方においては近代以降にみられる特徴である。また歯の側面観と台板の断面形態は、中世～近代に多くみられる特徴である。これらの特徴を考慮すると、本例は中世以降、とくに近代のものである可能性が最も高いと考えられるだろう。

まとめ

層位の状況、含まれる遺物から判断して、Ⅲ層は江戸時代以降の造成土であったと思われる。棧瓦や土器が大量に含まれることから、付近には寺院に関連するような建物跡があった可能性があるだろう。だが、今回の調査区内では、寺院に関連すると思われる遺構は検出されなかった。また、Ⅳ層中からも古代のものと思われる瓦が出土していることから、当時から付近に寺院があった可能性があるが、少なくとも調査区内から遺構は検出されなかった。土層の状況からみて調査区内は沼に近い状態になっていたものと考えられる。

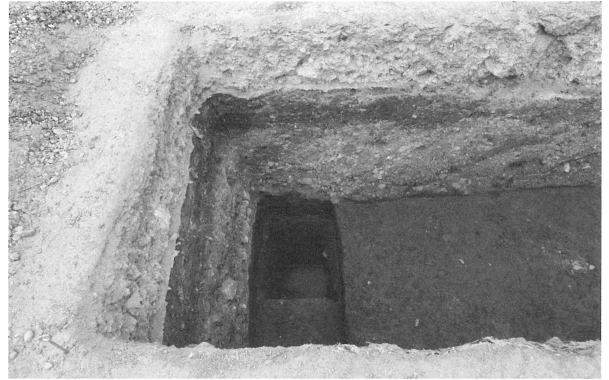
(土屋隆史)

註

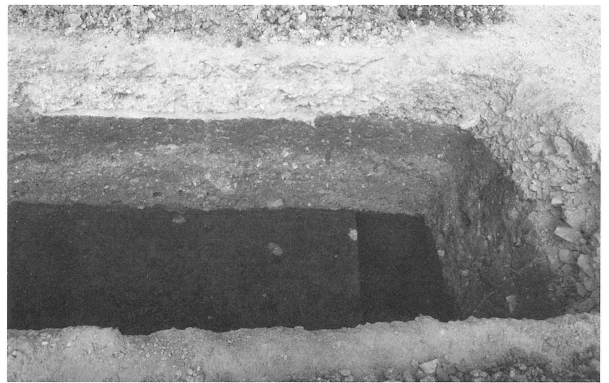
- (1) 奥田佳久・北村素一・山田辨治・石田茂輔「深草北陵々前の深草部事務所改築敷地の調査」『書陵部紀要』第27号、宮内庁書陵部、1976年。
- (2) 笠野毅「深草北陵排水設備改良工事箇所の調査」『書陵部紀要』第35号、宮内庁書陵部、1984年。
- (3) 加藤一郎「深草部事務所改築予定地における埋蔵文化財調査」『書陵部紀要』第60号、宮内庁書陵部、2008年。
- (4) 吉田理・稲田朋代『重要文化財 萬福寺松隠堂庫裏及び裏門・東方丈修理工事報告書』、京都府教育庁指導部文化財保護課、2013年。
- (5) 山崎信二「近世京都の瓦」『近世瓦の研究』、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、2008年。
杉本宏2000「棧瓦考」『考古学研究』第46巻第4号、考古学研究会、2000年。
- (6) 山下峰司「灰釉陶器・山茶碗」『概説中世の土器・陶磁器』、真陽社、1995年。
- (7) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究—日本律令の土器様式の成立と展開、7～19世紀—』、京都編集工房、2005年。
- (8) 樹種同定と保存処理は株式会社吉田生物研究所に委託した。図版の木製品は保存処理後の写真である。
- (9) 本村充保「遺跡出土下駄の全国集成に基づく編年および地域性の抽出に関する基礎的研究」『考古学論攷』29、奈良県立橿原考古学研究所、2005年。
本村充保「遺跡出土下駄に関する製作技法および使用樹種に関する基礎的研究—西日本出土資料を中心として—」『考古学論攷』32、奈良県立橿原考古学研究所、2009年。



1 西トレンチ全景（北から）



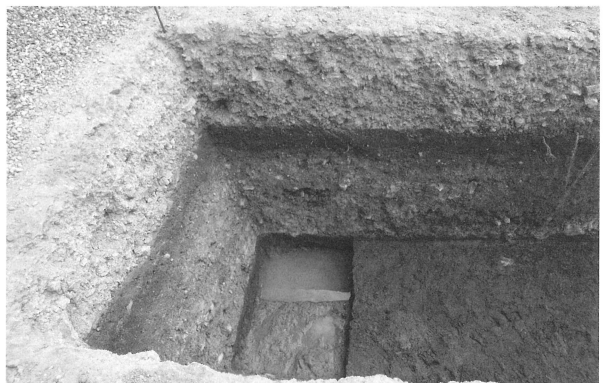
2 西トレンチ東壁北側（西から）



3 西トレンチ東壁南側（西から）



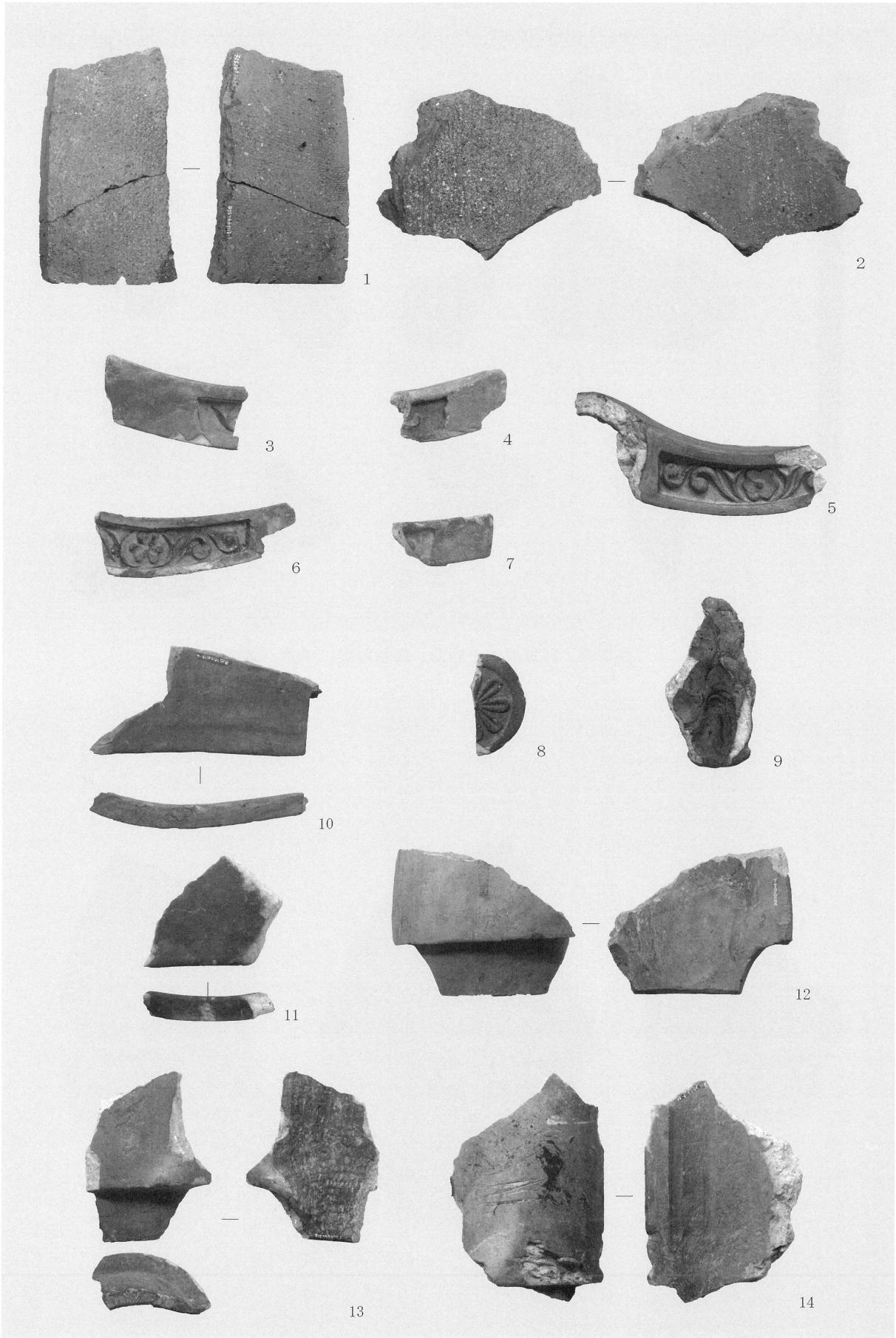
4 南トレンチ全景（東から）

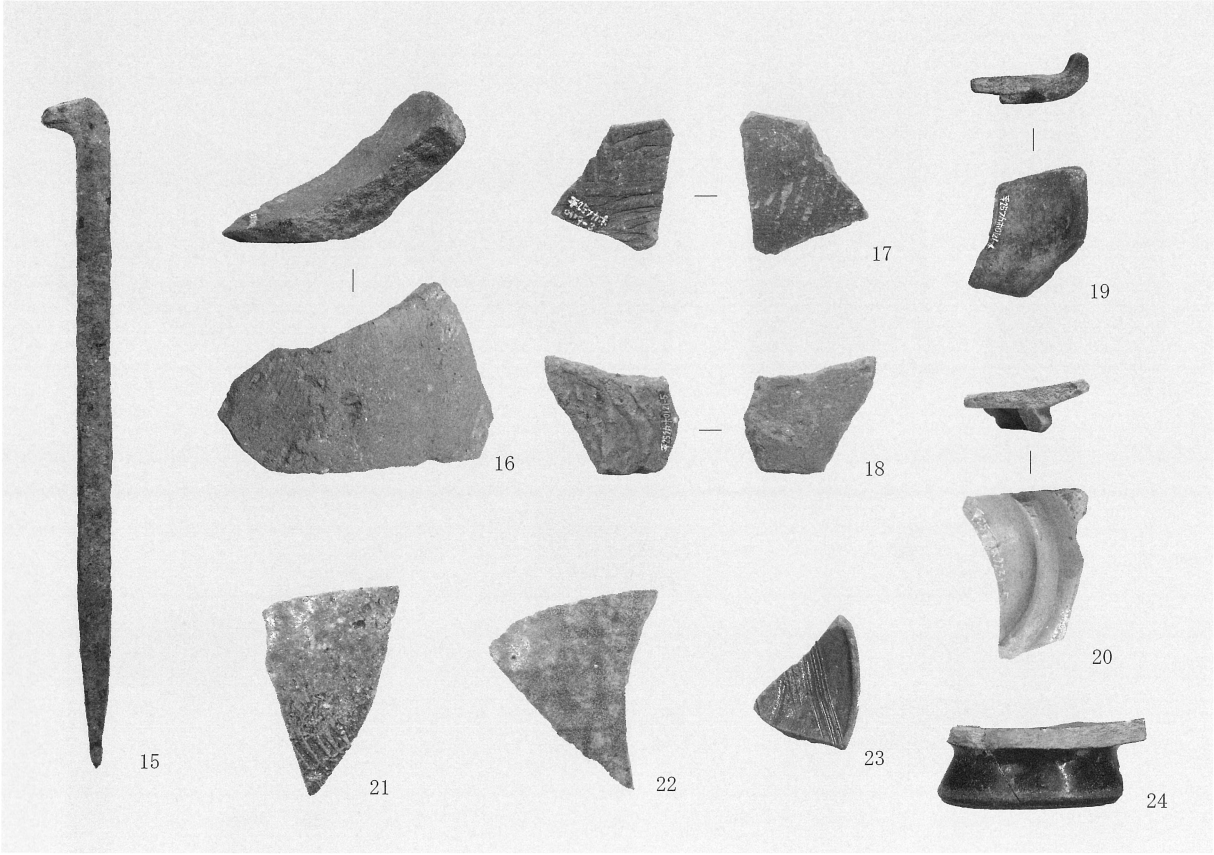


5 南トレンチ南壁東側（北から）



6 南トレンチ南壁西側（北から）

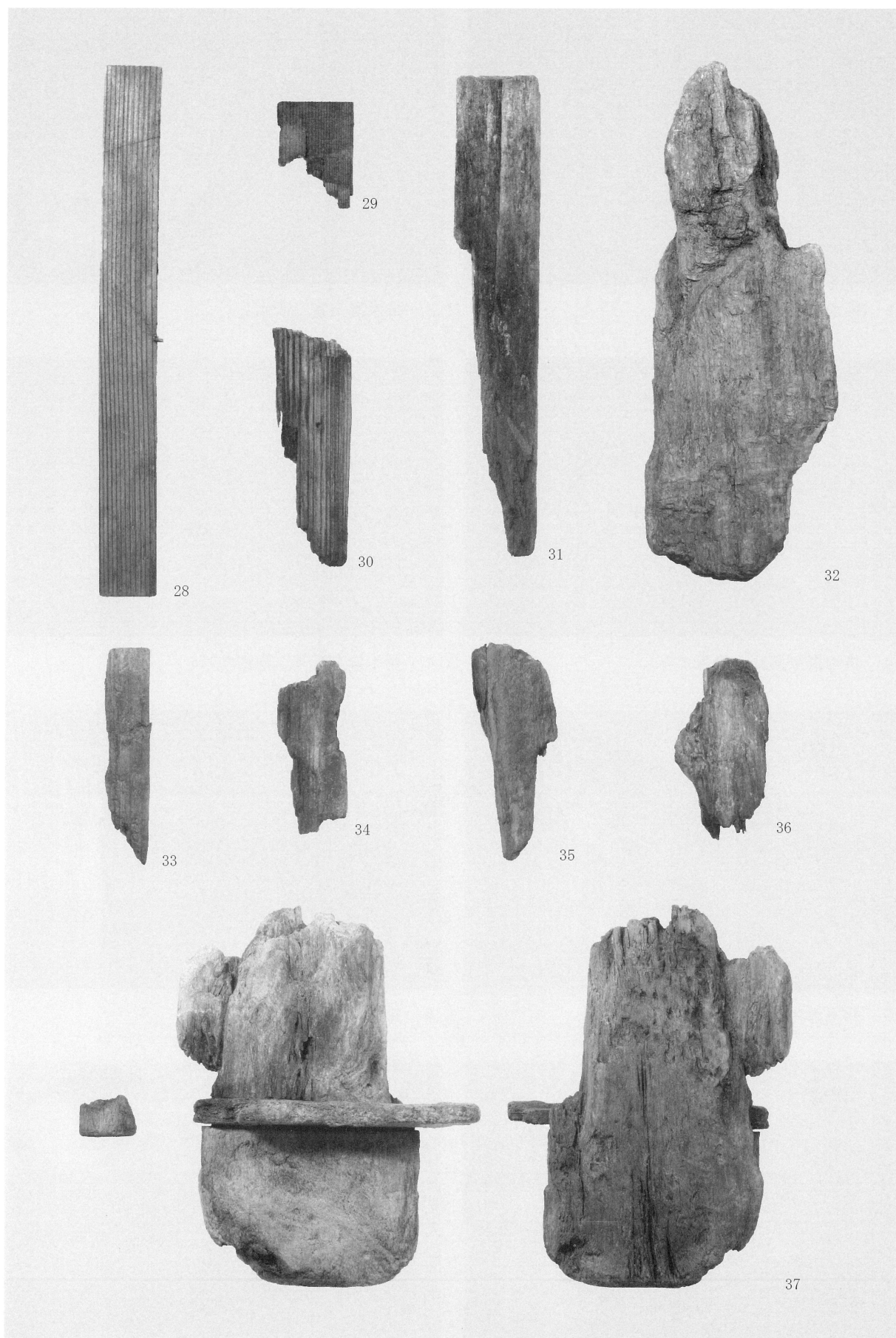




1 鉄製品、須恵器、土師器、灰釉陶器、擂鉢、茶碗



2 鉢、焙烙



木製品